

- sea breeze, *J. Meteor.*, 17, 645-660.
- Hsu, S.A., 1970: Coastal air-circulation system observations and empirical model, *Mon. Wea. Rev.*, 98, 487-509.
- Keen, C.S., and W.A. Lyons., 1978: Lake/Land Breeze Circulation on the Western Shore of Lake Michigan, *J. Appl. Meteor.*, 17, 1843-1855.
- Kimble, G.H.T., and Collaborators, 1946: Tropical Land and Sea Breeze, *Bull. Amer. Met. Soc.*, 27, 99-113.
- 気象研究所技術報告第11号, 1984: 117-128.
- 気象研究所技術報告第11号資料篇, 1984.
- 栗田 進, 1985: アメダス地上風の客観解析, 気象研究所研究報告書, 190-195.
- Lyons, W.A., and H.S. Cole., 1973: Fumigation and Plume Trapping on the Shores of Lake Michigan During Stable Onshore Flow, *J. Appl. Meteor.*, 12, 494-510.
- Lyons, W.A., and L.E. Olsson., 1973: Detailed Mesometeorological Studies of Air Pollution Dispersion in the Chicago Lake Breeze, *Mon. Wea. Rev.*, 101, 387-403.
- Moroz, W.J., 1967: A Lake Breeze on the Eastern Shore of Lake Michigan: Observation and Model, *J. Atmos. Sci.*, 24, 337-355.
- 中田隆一, 1985: 海風循環発生時の一形態, 天気, 32, 167-173.
- Sherman, C.A., 1978: A Mass-Consistent Model for Wind Field over Complex Terrain, *J. Appl. Meteor.*, 17, 312-319.
- 鈴木弥幸, 1984: 夏期瀬戸内海上の逆転層について, 天気, 31, 639-640.



人類とエネルギー研究会編

### 地球環境と人間

省エネルギーセンター, 1989年10月刊  
222頁, 1,400円(税込)

人類とエネルギー研究会が主催した講座をまとめた形になっており、プロローグ「いまなぜ地球環境が問題なのか」(生田豊朗)、第1話「地球に異変が見えてきた」(根本順吉)、第2話「地球温暖化を科学する」(横山長之)、第3話「森がなくなり魚が消える」(大喜多敏一)、第4話「環境問題が世界をゆるがしはじめた」(茅陽一)第5話「CO<sub>2</sub>規制はどのような影響をもたらすか」(湯浅俊昭)、エピローグ「成長の限界から持続する開発へ」という内容である。

昨年は、地球環境という文字が新聞、雑誌、テレビをにぎわし、大きな話題となった。この本は昨年10月に発行されているが、すでにいろいろなマスメディアの報道の洪水の中で、すでに何度も耳にした内容が多い。違う分野で働く人がちょっと知っておきたいと言う入門書としては、長さが手ごろで、比較的まとまっている。

第1～3話は気象に関係ある分、ページ数の関係もあるかも知れないが、物足りなさを感じる。気象関係に携

わるものとしては、このような問題に対して知識を得たいと思うならば、他の文献も当たって見た方が良さだろう。第4話では、環境問題に関する国際的な取り組みが歴史を追って説明しており、よくまとまっている。第5話はエネルギー消費についての試算がなされているが、根本的なコスト計算をどのように行ったかが今一つ分かりにくく、このような試算が果してどのくらい確かで未来性があるものか疑問が残る。ここで強調されているのはCO<sub>2</sub>発生量を20%削減するのはいかに難しいかと言うことである。

どう考えても地球環境が悪くなっているのは実感されていることである。地球環境に関する問題については、第4話にあるように「単純に抑え込むとか、全然何もしないとかいうのは答えとしては一番まずい戦略であり、やはりわれわれとしては問題は不確定であり、しかも対策コストが非常に高いという前提を考えに入れて行動すべきです」ということであろう。世界の50億人の人々が今の日本人の生活をするだけ地球は大きくない。88年のアメリカの大干ばつで一躍注目を集めた温暖化の問題では、このようなことをたくさんの人が認識し、一般の教養、常識としてこのような本が出版されるようになったことが大きな成果だったと思う。

(気象庁長期予報課・林 久美)